豊橋のオバサン

東海道五十三次を歩いてみたくなったのは、ふとした事からだった。お茶漬け海苔の景品に広重描く浮世絵のセットを貰ったことから始まった。単純なきっかけではあったが、小さな刺激が私の心を捉えて離さなくなり、やがてはその衝動を抑え切れなくなるまでに三か月も掛からなかった。

十九歳の春まだ早い三月五日の朝、私は日本橋のたもとよりリュックにテント、ナベ、カマ持参でヨイショと第一歩を踏み出した。京都三条大橋まで五百十キロ、十九日間の徒歩旅行の始まりであった。

概して快適な旅ではなかったものの、行く先々で暖かい人情に触れ、そのお陰で私の旅程は日一日と伸び、落伍することなく無事京都に辿り着くことが出来たのである。その十九日間の旅に人生の縮図を見て、世間の仕組みを手に取るように理解する事が出来た。私は責任ある大人への脱皮を急速に完了させる事が出来た幸せ者だったのかもしれない。

旅先で出会った大勢の人の中で忘れられないのが豊橋のオバサンである。オバサンとは直接知り合ったのではないが、彼女のぐうたら亭主と知り合ったことからこの話は始まる。

豊橋にやっとの事で辿り着いた頃は、もうとっぷりと日も暮れていた。とにかく食事をと飛び込んだのが町外れの大衆食堂だったが、ここに居たのが件のぐうたら亭主である。

一見紳士風の彼は私を見つけるや、何かと面倒をみはじめた。食事はもとより酒までご馳走になり、若い頃の軍隊の話などを得意げに聞かされたものである。その時までは何処かの会社社長かと思っていた私は、酒席によって来た何やら花街の人らしい女性にまでコーヒーなど奢っているのを見るにつけ、随分気前の良い人もいるものだと感心していた。

「コーヒー一杯が八十円とは安いじゃないか、皆に持ってきてやれ。」と大きな声で確かに言っていた。

食事も終わり誘われるままに彼の家に泊めて頂くことになったものの、その頃から私はなにやら一抹の不安を感じていたが、果たして彼の家に着くや愕然としたのがその住まいであった。棟割長屋の一区画はお世辞にも広いとは言えなくてオバサンと子供三人が父の帰りを待っていた。　高校生を頭に三人の子供は二段ベッドを二つ並べて、父と寝床を共有している有様だった。その長男を追い払ってまで私の寝床を作ってくれるオバサンにお礼を言う言葉も失い、のこのこ付いて来た軽率さを悔いるのが

精一杯であったが、歩き疲れた体は後悔の念をすぐに追い払い私は深い眠りに落ち込んだ。

翌早朝、オジサンとオバサンが激しく言い争う声で私の眠りは覚まされた。

「弁当のおかずのメンチカツが六十円もするのか！」

「あんたに言われることはない！」

と、こんな内容だったような気がするが、私は自分の耳を疑った。コーヒー一杯が八十円とは安いと言って女性に奢っていた筈のあの同じ口が、たった今子供の弁当のおかずが六十円とは高いと言って怒鳴っている。

目は覚めていても寝床から出るわけにもゆかず、そのまま私は寝た振りをして事態の収まるのを待った。昨夜の後悔を上回る後悔が私の体を押さえつけていた。悲しい事だと思った。

何事もなかったような振りをして朝ご飯を用意し、昼食にと心尽くしのオニギリを下さったオバサンの顔はまともに見られず、お礼も言えたかどうかも分からず、私は逃げるようにその家を出させてもらった。彼のぐうたら亭主はまだ寝ていた。

しかし話はこれでは終わらない。数時間後、豊橋城の公園で草むしりをしている作業員の中に私はオバサンを見つけ、心臓が止まりそうになる。彼女も私を見つけ被っ

ていたタオルを取りながら、恥ずかしそうにペコリと頭を下げてくれた。無事郷里に着いたら知らせて下さいとも言ってくれた。

なんと言う事かと繰り返し呟きながら私は豊橋を離れた。悲しかった。

旅を終え、郷里に着いた私が無事到着の旨オバサンに知らせたのは言うまでもない。オバサンには、阿波しじらの小銭入れを、子供たちには文房具を、せめてもの気持ちで送らせてもらったが、オジサンには何も差し上げる気にはなれなかった。